

2つの転機

東海愛知新聞社
代表取締役社長

大津 一夫 氏



教育随想



令和2年2月1日

2月号

発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

- 教育随想…………… 1
東海愛知新聞社
代表取締役社長
大津 一夫 氏
- この人に聞く…………… 2
岡崎ラグビースクール校長
野々山明宏 氏
- 羅針盤…………… 2
井田小学校
校長 山本 照司
- ふれあい…………… 3
美川中学校
教諭 伴 峰昌
- 特集…………… 4
今なお語り継がれる 岡崎の昔話
- お知らせ…………… 6
- フォト・ヒストリー… 8
舗装路整備(昭和30年)
- この本を…………… 8

四十年以上の記者生活で、二つの転機があった。最初は四十歳を超えたころ。正月休みに突然、「今年は大勢の人と知り合いになるう」という思いが沸き上がった。

友人の誘いには積極的に参加した。取材で出会った人には、その友人を紹介してもらった。結婚して子供が生まれると生活が安定し、さらにその思いは強まった。

あちこちで知り会った人たちから声を掛けられるようになり、驚くほど多くの人とつながりができた。人間関係にも自信ができた。かつてはどちらかという引込み思案だった性格も変わってきた。

次の転機は長男が中学一年生で不登校になったときだ。学校に行かなくなった彼は、昼は寝て、日が暮れると起き出し、深夜から朝までパソ

コンをいじっていた。どうして不登校になったのか、自分でも分からな

い彼は、生活の不規則とともに悩んでいるらしい。そう思った私は、深夜までパソコンに向かう彼に付き合った。

そのとき何気なく手にしたのが『啄木全集』だった。読み始めると石川啄木が不登校の草分けだったことが分かった。私は彼の短歌や詩、日記、小説などに夢中になった。特に短歌と日記に感銘を受け、何度も読み返した。

そうして読書に熱中すると、記事にも自信ができた。取材相手の心情に理解が深まり、自分の記事を読み返しても、よく書けたと思ったりした。

読む力は書く力だと思う。IT(情報技術)の普及で、誰でもどこでも

簡単に情報を受け取ったり、発信できたりする環境になった。しかし、書いたことが本当に自分の言いたいことなのか、相手に伝えたいことなのか、もう一度考えてみる必要があるだろう。

(おおつ かずお)





相手を思いやる心

岡崎ラグビースクール校長

野々山 明宏 氏

創立以来半世紀の歴史をもつ岡崎ラグビースクール。これまで、延べ六五〇〇人の修了生を輩出した。現在は市内を中心に、幼児から中学生まで約八十人が在籍する。

平成三十年四月、伝統あるスクールの校長に新しく就任したが、野々山明宏氏である。

野々山氏とラグビーの出会い、小学校一年生のときである。岡崎ラグビースクールの創立者の一人である父親の影響で通い始めた。

「はじめは、ボールを持ったまま全力で走り切ることが楽しかった。ボールを使った鬼ごっこみたいで、本当に楽しくて、楽しくて。そのときから、ラグビーを辞めたいと思っただことは一度もありません。」

ラグビーの楽しさに惹かれ、高校の部活動、社会人のクラブチームとラグビーを続けた。

「ラグビーをやってきて、パスをつないでいく魅力にとりつかれました。相手のことを思いやり、受け手のことを考えてパスを出すこと、そのパスがどんどんつながっていくことがとてもうれしく感じました。」

そして、再び本スクールに携わるようになり、多くの方に推されて指導者となった。そんな中、子供たちに教える難しさを日々感じていると言う。

「こちらが話すだけでは、聞いていない子供が多い。だから、プレーを実際にやって見せて、子供たちにやらせて、褒めて指導します。本人が体を動かして実際にやらないと身に付きません。そうして身に付けた技術を、子供自身が、自分で判断して試合でできるようになったときは、本当にうれしく思えます。」

岡崎ラグビースクールは、五十年間、順風満帆に進んできたわけではない。平成十一年頃からは、生徒数が徐々に減り、存続の危機もあった。「一学年、七人そろわないときがありました。宣伝したり、保護者の方に呼びかけをしたりしても、なかなかラグビーの楽しさを伝えきれませんでした。苦しかった。」

何とか多くの人にラグビーを知っ

てもらうために、できることは何でもやろうと考え、シヨッピングモールでラグビーボールをパスする体験活動を行った。また、岡崎城下家康公まつりで、子供と一緒にボールを持ち、ジャージーを着てパレードに参加した。そうした活動に加え、日本で開催された「ラグビーワールドカップ」の影響もあり、入校希望者は続々と増えている。

ラグビーの魅力について、

「やはり、ONE TEAM。体が大きくななくても、足が速くなくても、どんな子でも役割があるので、活躍でき、一つになれます。ラグビー憲章には、『尊重』という言葉があります。自分勝手なパスを出すのではなく、ボールの受け手のことを考えたパスを出す。その過程で、相手を思いやる心を育てたいです。」

と熱く語る。

いつかきつとこのスクールから日本代表を出したいと、目を輝かせながら話す野々山氏の挑戦は続く。



氏名 ののやま あきひろ
生年月日 昭和四十九年四月八日
住所 岡崎市福岡町

学校行事の意義と役割を問い続ける

井田小学校

校長 山本 照司

例年、五月に開催されることが多い小学校の運動会。保護者や教員の負担軽減、子供の健康管理を考慮して種目数を絞るなど、全国各地で競技や演技への時短化、縮小化が進んでいる。本校においても、学年の演技時間を短縮したり、学区共同開催で行われる交通安全・防災防犯パレードを縮小したりして、加重負担にならない運動会の在り方について検討や改善を進めてきた。

そんな時代の流れの中、みんな力を合わせ、持てる力を出し切った新しい成果や感動を味わう運動会にしたいと願い、今年度、行進を全校集団演技として位置づけた。金管バンド部の奏でる行進曲とともに、市内でいちばん多くの児童数を有する井田小学校の一五三人が、一斉に前へ踏み出した。その瞬間、一人一





A子の思いに寄り添って

美川中学校
教諭 伴 峰昌

四月、中学二年生に進級したA子の担任となった。一学期半ばを過ぎた頃、A子は、体調不良で欠席をしたことを機に、欠席が続くようになった。家庭訪問をしても本人に会えない状態が続いた。A子と会って話をしたい。A子の笑顔を見たい。気持ちばかりが焦った。

明確な欠席理由も見い出せず、A子の様子は、母親を通して知ることしかできなくなつた。病院では、当分は登校刺激を与えないという診断を受けた。A子のエネルギーが貯まるまで待つしかなかった。中学三年生に進級したA子。始業式の日に家庭訪問をし、A子の部屋のドア越しに声をかけた。「今年も担任をさせてもらうことになったよ。よろしくね。」

時が止まったかのような静寂。残念ながら反応はなく、A子の家をあ

とにした。

ところが、翌朝、A子の母親から学校に電話連絡が入った。

「A子が会って言っています。」

私が帰った後、ご両親がはたらきかけてくださったのだ。夕方、A子が私を玄関で出迎えてくれた。

その日以来、家庭訪問の際に、A子が楽しかったことについて話した。小学校の子供会でフットベースボールに参加したときのことを笑顔で話すA子。その様子から、少しずつ学校の話題を出していこうと決めた。

私が学校での出来事を伝えるようになって、始めはあまり表情を変えずに聞いていたA子だが、時おり笑みを浮かべるようになった。その姿を見て、一学期の半ば、学校の行事を見に来ることを提案してみた。しかし、A子は黙りこんだ後、

「ちょっとまだ無理。」とつぶやいた。

二学期。会話の中から、A子が学校の出来事に関心をもち始めたのが読み取れた。チャンスだと思い、九月の終わり、文化祭の合唱コンクールで歌う曲の入ったCDと楽譜を手渡した。文化祭数日前には、級友からの手紙を携えて、家庭訪問をした。「合唱を見に来たがどうか。みんなA子に会いたがっているよ。」

級友の手紙に目を通したA子は、小声ではあったが、力強く「行ってみようかな。」と言った。

文化祭当日、A子は母親と共に登

校した。私は、体育館の後方でA子に寄り添うことにした。歌が始まると、A子が微かに聞こえる声で口ずさんだ。歌を覚えていたのだと分かって、胸が熱くなった。

「みんな、すごいね。うまいね。」

そう言ってA子は笑った。文化祭以降、A子は週一回の別室登校の目標を自ら掲げた。私は、数人のクラスメイトと別室で給食をとる機会を設けた。

三学期、A子の卒業式参加の気持ちを高めたいと願い、フットベースボール大会を計画した。A子の大好きな種目である。

「学級レクでフットベースボール大会をやるんだ。参加してはどう。」給食の際に、声をかけた。A子は少し考えた後、こうつぶやいた。

「出てみようかな。」

数日後、クラスメイトとフットベースボールを楽しむA子の姿があった。ボールを蹴る。塁上を走る。級友と声を掛け合う。A子の笑顔が眩しかった。

三日後の卒業証書授与式。A子はクラスメイトと共に卒業証書を受け取り、輝く笑顔で巣立っていった。



人の真剣な表情が輝きを放ち、全身を使って表現する集団美や一体感が、運動場から観客席へと溢れ出した。「元気に手を振りながら歩いている我が子を見ているだけでなんだか泣けてくる」。来賓テントの裏にいた保護者が、その感動を思わず口にした。

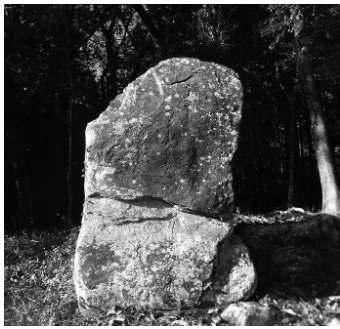
体育主任が、「練習時間は例年と同じ。違うのは気持ちの持ち方と伝え方。小指を目の高さで揃えて手腕を元氣よく振ろう。足音を一つに合わせよう」と、指導内容を具体的に伝えて、練習に臨む気持ちを高めた。発達段階に大きな差がある小学生に分かりやすく心に響く指導は、子供たちの向上心を喚起し、一五三人の圧巻の全校集団演技を創り上げた。

地域と学校を結ぶ重要な学校行事は数多い。時代の要請にこえる鍵となるのは、我々教師が、子供たちを育てるといふ意識を醸成しながら、行事の適切な在り方や運営方法を考究することである。学校行事の「時短化」「縮小化」が進む中であるからこそ、学校行事を通して育てる力とは何か、その意義や役割を再認識しなければならぬ。未来への成果の形として残せる集団への所属意識や連帯感をしっかり見据え、今後の学校行事に取り組んでいきたい。

今なお語り継がれる 岡崎の昔話

小太郎岩 (榎山町)

昔、榎山の里に市川小太郎という力持ちがいた。あるとき、熊野の山から昼一枚ほどで厚さが一尺あまりもある大きな一枚岩を背負って帰り、村の通りにある小川の橋にした。この小川を往来する村人は難儀を救われて、たいそう喜んだが、それにもまして小太郎の怪力にひどく驚いた。



◀怪力自慢の小太郎が川に渡して橋にした小太郎岩 (榎山町)



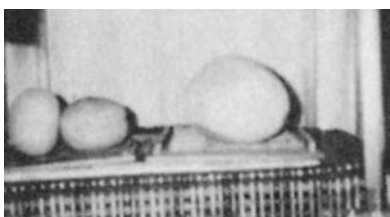
◀馬に餅を与えた話が伝わる実相寺 (竜泉寺町)

観音様のくれた餅 (竜泉寺町)

信心深い村人と経典を背中に乗せた馬がはるばる京都から寺を目指したが、途中の急坂で馬が立ち止まってしまう。村人が一心に経文を唱えると白髪の老人が現われ、馬の舌の形をした餅を与えた。すると馬はたちまち元気を取り戻し、寺に辿りついた。

雨ごい石 (羽根町)

日照りが続いたある夏の日、村人が池に棲みつく大鰻を退治した。そのお礼として、岡の竜宮に棲む竜神に雨を降らせてもらうことができた。その後、石に姿を変えた鰻を雨ごい石として神社に祀り、この池を鰻池と呼ぶようになった。



▲稲荷神社の「雨ごい石」(羽根町)

昭和四十八年に刊行された「おかざきのむかしばなし」の巻末にて、編者宇野正一氏はこう語っている。「現代に生きるものは民話を人間のたましいの現象として、大切に扱い、庶民の貴重な文化財として発掘し、残していかねばならぬ責任がある。」歴史深い町岡崎に、今も残される昔話や、その史跡に触れる経験を通して、子供たちは多くのことを学び、感じるだろう。そして、子供たちは、やがて先人たちから受け取ったものを次代へと受け継いでいく立場となり、更に価値を高めていくに違いない。

今回「おかざきのむかしばなし」「続・おかざきのむかしばなし」と「ぬかたの民話」に掲載される昔話の中から、市内に残る史跡にまつわる話を中心に取り上げた。急速に開発が進み、風景が大きく変わっていく中でも、これまで受け継いできた岡崎の歴史や昔話を、これからも守り続けていきたい。



▲ぬかたの民話「小太郎岩」他

▲続おかざきのむかしばなし

▲おかざきのむかしばなし



▲村積山の毒石 (奥山田町) [B]
この石に触ると病にかかるとされる。



▲孝婦とらの像 (生平町) [A]

貧しい家に生まれたとらは、父の看病をしながら家族のために働いた。そんな孝行が認められ、とらは、殿様から褒美をもらった。今も生平小学校内で子供たちの姿を見守っている。



▲上里神社 (上里) [C]
夢の中で助けを求めたとされる川底観音が祀られている。



◀竜海山のお地藏さん (明大寺町) [D]
仕事に命を落とす不幸があった、働き者の小僧が祀られている。



▲矢作神社の「矢竹」(矢作町)

矢作の里 (矢作町)

日本武尊が賊を退治しようとするこの地を訪れたとき、矢が足りないことに気づいた。そのとき、光輝く着物を着た一人の神様が、中洲に生えている矢竹を切り、日本武尊のもとに届けた。その後、日本武尊はその矢で賊を滅ぼした。このようなことがあってから、この地は矢作の里と呼ばれ、川の名も矢作川と呼ばれるようになった。

▶鹿が松 (5代目)



◀鹿が松 (初代) (北野町)

三鹿の渡し (大門・北野町)

足利尊氏が、京の都に上ろうとして、大門の里までやってきた。しかし、矢作川が大水で渡れない。大門の八剣神社にお祈りしたところ、三頭の白い鹿が現れ、尊氏の軍勢を導いた。

また、徳川家康が桶狭間の戦いに敗れ大樹寺に逃げようとしたのだが、大水で矢作川が渡れなかった。絶体絶命の家康は、川の堤防の松の木の下で、川向こうの八剣神社にお祈りしたところ、このときも三頭の白い鹿が現れ、家康を導いた。



▲真福が建てたとされる真福寺 (真福寺町)

真福長者 (真福寺町)

岩津の里に真福という若者がいた。ある日、真福が子供たちにいじめられていた青へびを助けると、その晩、その青へびが枕元に現れ一匹の犬を置いていった。真福は、青へびの言った通りにその犬に毎日たくさんのご飯をあげた。すると、ご飯を食べた犬の口から金塊が出てきた。次の日もその次の日も犬は金塊を出し、真福は大金持ちになった。真福寺はその真福が建てたお寺だと言われている。



浄瑠璃姫伝説 (矢作町)

牛若丸 (のちの源義経) が矢作の里に泊まった夜、浄瑠璃姫の奏でる美しい琴の音色が聞こえてきた。牛若丸は琴の音色に合わせて、笛を吹いた。それをきっかけに、二人は心を寄せ合った。牛若丸は旅の途中であったので二人は別れたが、約束の時期になっても戻ってこない牛若丸に忘れられたと思い込んだ浄瑠璃姫は、悲しさのあまり菅生川に身を投げた。



▲誓願寺の「浄瑠璃姫の墓」(矢作町)

主人を守った犬 (宮地町・下和田町)

上和田城主の宇都宮泰藤が白い犬を連れて鷹狩に出掛けた。神社で休んでいると、木の上から大蛇が今にも襲いかかろうとしていた。それを見つけた白い犬は危険を知らせるために激しく吠え立てたが、泰藤は眠りを妨げられたことに怒り、犬の首を刀ではねてしまう。犬の体は2つに切れたが、頭は大蛇ののどに食らいついて泰藤を守った。このことから、この神社を「犬頭神社」と名付けた。一方、尻尾は下和田の地まで飛んだ。人々は、そこにお宮を建て、「犬尾神社」と名付けた。



▲犬頭神社 (宮地町)



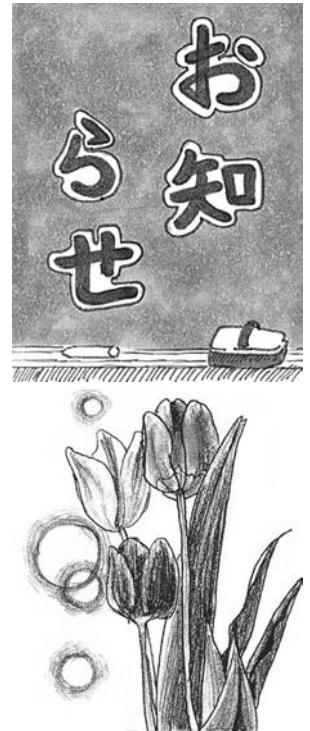
▲犬尾神社 (下和田町)

金仏 (若松町)

ある夏、若松村では水が足りず、思うように米作りができなかった。そこで村人が池づくりを始めると、地中から金の仏像が出てきた。和尚は、豊年満作を確信し、池を掘り続けると、水がこんこんとわき始め、若松村は水の心配もなく、実り豊かな村となった。



▲等周寺の「金仏」(若松町)



●教育最新情報

◆来年度の研究発表校

来年度の市委嘱校の研究主題と公開する授業の教科・領域は次の予定である。

- 緑丘小学校（国語科・算数科）
- ・十月二十一日（水）

【研究主題】

「主体的に学び続ける子供の育成
―目標・学習・評価の一体化を通して―」

- 細川小学校（全教科）
- ・十月二十八日（水）

【研究主題】

「学びに向かう力を育む授業の創造
～「みんなで学ぶ・みんなが伸びるチーム学習」を通して～」

- 額田中学校（全教科）
- ・十一月十一日（水）

【研究主題】

「自ら学び続け、未来を切り拓くことができる生徒の育成
―CRSで「学びに向かう力」を引き出す授業づくり―」

◆自主発表

- 竜海中学校
- ・十一月十三日（金）
- 附属岡崎中学校
- ・九月二十九日（火）
- 附属特別支援学校
- ・十一月六日（金）
- 附属岡崎小学校
- ・十一月十九日（木）
- ・二十日（金）

◆第63回小中学校書き初め展

一月十八日（土）、十九日（日）の二日間、岡崎市美術館において、小中学校書き初め展が開催された。

市内小中学校及び聾学校、愛知教育大学附属学校から

二千点以上の作品の出品があり、展示された。昨年度から二日間の開催となったが、本年度も六千人余りの方が会場を訪れ、児童生徒が心を込めて仕上げた作品を鑑賞した。



●表彰

◆令和元年度全国中学校体育大会
展示された書き初め作品は文集「おかげさ」に掲載される。

◆第27回全国中学校駅伝大会
女子の部

優勝 六ツ美北中

◆交通安全第71回岡崎市民駅伝競走大会

一月十九日（日）に市民駅伝競走大会が開かれた。市内



中学校から、男子32チーム、女子32チームが参加した。

【大会の結果】

○中学校男子の部

- 優勝 竜海中学校 A
- 二位 矢作中学校 A
- 三位 葵中学校
- 四位 六ツ美北中学校 A
- 五位 南中学校 A
- 六位 竜南中学校 A

○中学校女子の部

- 優勝 六ツ美北中学校 A
- 二位 矢作中学校 A
- 三位 竜海中学校 A
- 四位 矢作北中学校 B
- 五位 六ツ美北中学校 B
- 六位 矢作中学校 A

区間賞

- 三区 六ツ美北中 鈴木 愛菜
- 五区 六ツ美北中 棧敷真菜美

- 区間賞
- 二区 六ツ美北中 松山 由奈
- 三区 六ツ美北中 鈴木 愛菜
- 四区 六ツ美北中 小山 心結
- 五区 六ツ美北中 小嶋 聖来

◆第68回愛知県中学校駅伝大会

男子

- 二位 竜海中学校
- 三位 葵中学校

◆2019愛知陸上競技協会駅伝競走大会

○中学男子の部

- 二位 葵中学校
- 二位 葵中 河野 温喜
- 優勝 六ツ美北中学校
- 三位 矢作北中学校
- 優勝 竜海中 A
- 池上琉一・十河拓平
- 西野 成・山口浩崇

二位 葵中A

梅野暖人・中山 楓

近藤晴弥・河野温喜

三位 矢作中A

榊原寛也・近田一耀

細井奏太郎・竹田大輔

○中学女子の部

優勝 竜海中A

高木杏珠・天野花音

壁谷裕奈・西島沙羅

二位 矢作北中A

折谷優実・高吉ももこ

森田琉水・本田万結

三位 矢作北中B

内田詩乃・森田玲那

秋竹奏音・秋竹凜音

◆第7回全国小中学校リズム

ダンスふれあいコンクール東

海大会

○中学生規定曲の部

CBCテレビ賞(全国大会出場)

河合中学校 河合☆☆

◆第38回全国小学生バンド

フェスティバル

銅賞 竜美丘小学校

◆第54回全国野生生物保護実

績発表大会

日本鳥類保護連盟会長褒状

美合小学校

◆第13回東海・北陸地区中学生

ものづくり教育フェアin愛知

第18回創造アイデアロボット

コンテスト

○基礎部門

優勝(全国大会に出場)

福岡中 西村 勇吹

梅村 空輝

二位(全国大会に出場)

福岡中 都築 那葵

小野 煌蘭

三位(全国大会に出場)

福岡中 鷺津 晴大

川崎 寛大

◆平成31年度フラワー・ブラ

ボー・コンクール

○学校花壇コンクール

優秀賞(えびせんべいの里賞)

形埜小学校

○校外花壇コンクール

優秀賞 形埜小学校

◆平成31年度フラワー・ブラ

ボー・コンクール付帯事業

○東山植物園モデル花壇設計

図コンクール

特選(東山植物園賞)

形埜小学校

○花と私の作文コンクール

愛知県知事賞

形埜小 神谷 奈津

中日新聞社賞

形埜小 今井龍一朗

○私たちの学校花壇を描いた

写生コンクール

中日新聞社賞

形埜小 井戸田飛鳥

◆第34回「WE LOVE

トンボ」絵画コンクール

金賞(朝日小学生新聞賞)

羽根小 宮内 蒼真

◆第44回ゆうちょアイデア貯

金箱コンクール

すてきなデザイン・アイデア賞

大門小 高瀬 葵

連尺小 神谷 明熙

根石小 大橋 一輝

◆第69回全国小・中学校作文

コンクール

○中学校の部

最優秀賞

甲山中 服部 沙紀

優秀賞

甲山中 加藤 桃子

佳作 竜海中 野田 一翔

◆第13回「いつもありがとう」

作文コンクール

○高学年の部

佳作 岩津小 大水 音諒

○画の部

特選 城北中 為水ひなた

◆第38回中学生非行防止ポス

ターコンクール

愛知県知事賞

竜海中 安宅 来光

◆2019年度明るい選挙啓

発ポスター

入選 竜海中 林 木葉

◆第71回赤い羽根協賛児童生

徒作品コンクール

○書道の部

佳作 竜海中 丹下 優妃

○ポスターの部

佳作 南中 杉浦 由莉

◆第60回小学校作文コンクール

特選CBCラジオ賞

梅園小 石原 南子

◆社会を明るくする運動作文

コンテスト

○小学生の部

中日新聞社賞

城南小 中根 鏡子

◆JA共済小中学生書道コンクール

○半紙の部

金賞(中部大会に進出)

城南小 内田 結

◆第87回全国書画展覧会

○書の部

特選 城北中 為水ひなた

○画の部

特選 南中 手寫咲美子

特選 南中 小畑 晴香

特選 南中 酒井 麻衣

◆第35回全国硬筆コンクール

○小学五、六年の部

文部科学大臣賞

上地小 牧 美里

◆第16回「徳川記念財団コン

クールin岡崎」徳川家康公作

文コンクール

最優秀賞(徳川賞)

三島小 手島奏太郎

優秀賞(家康賞)

井田小 海老澤亮誠

竜美丘小 松澤 央都

竜海中 柿澤 絃彰

岡崎市長賞

附属岡崎小 根本真菜美

岡崎市教育委員会教育長賞

上地小 内田 葵

岡崎商工会議所会頭賞

大樹寺小 山中 健介

中日新聞社賞

竜美丘小 中田 絢日

大樹寺貫主賞

藤川小 山口 深里

伊賀八幡宮宮司賞

大樹寺小 平山 沙和

龍城神社宮司賞

附属岡崎小 服部 悠希

・カ
ツ
ト
電
南
中
野
々
山
真
衣

舗装路整備 (昭和30年)

写真提供：南中学校

昭和三十年、本校は、文部省の産業教育研究指定校に指定された。産業教育とは、現在の技術・家庭科のことである。当時は、美しい校庭を作ることについても、産業教育にとって重要な要素であった。

写真は、校庭整備の一環として、校舎南側にある生徒用通路を、全校生徒と教師たちが一緒になって、整備している様子である。同時に、現在の校舎南側の昇降口前にはある築山に、『明朗にして自由、健康にしてはつらつ』という校訓塔が設置された。

今も美しい校庭の整備は、生徒たちの心を豊かに育てる大切な要素である。



止まらないラグビーへの熱い思い。子供たちに「尊重」の精神を伝え、相手を思いやる心を育てたいと語る野々山氏。

クラスの児童が、ラグビーを始めたとうれしそうに言った。ラグビーの魅力を知る人たちの裾野が広がることを願う。

頬を赤く染め、風を切って雪の斜面を滑る子供たち。何度転んでも起き上がり、挑戦する。「大丈夫」と差し伸べられた手から、仲間の温かさが伝わる。雪山での経験を終えた子供たちは、思いやりの心や集団行動を身に付け、一回り頼もしく成長する。

ど ホ

ツ

如 目



何度でも挑戦 (新香山中)

伝えられてきた「岡崎の昔話」。それぞれの話には、ふるさと岡崎に息づく先人の思いが詰まっている。

次代を創る子供たちが、目を輝かせながら、先人の思いを、そして、ふるさと岡崎を語る。そんな姿を楽しみにしている。



*もしすべてのことに意味があるなら
鈴木 美穂
ダイヤモンド社 ¥1,430

心に残った一文
神様は、乗り越えられない試練は与えない。

若くしてがんにかかった筆者。「ミヤネ屋」など、デスク兼キャスターとして活躍の最中の衝撃であり、「ただ、泣くことしかできなかった」と語る。

自身の病気や命に向き合い、人との出会いをきっかけとして、絶望が光に変わる。そして、自身の辛い体験を生かし、がん患者とそれを支える人たちのための施設「マギーズ東京」を設立した。仕事、恋愛、結婚、社会、夢について綴られる本書。「生きる」「生かされる」意味について考えさせられる一冊である。

*円谷幸吉 命の手紙 松下茂典
文藝春秋 ¥1,580

*日本の戦後を知るための12人 池上 彰
文藝春秋 ¥1,650

*ダンゴムシに心はあるのか 森山 徹
PHP出版 ¥880

城南小 高 鋤 利行